

◆民俗音楽の中の非日常性

民俗音楽は、労働や遊びといった日常の営みにともなったり、娯楽として機能したりするだけでなく、非日常的(宗教的)な役割を担うことも多い。

その主な活躍の場は年中行事として行われる**祭り**の中であり、そこでしばしば演者は神と人(あの世とこの世、非日常と日常)を媒介し、時には自ら神の役割をもになる。そうした場合、異装や仮面が施されることも多い。

a) 祭りとは

集団儀礼の一つ。日常から切り離された特別な時空に人々が集い、各種の儀礼行為を経験することによって、潜在的に持つ理念を実感として共有する行動様式。神話的な世界の中で神と人が融和するための宗教的な祭りが原始的かつ一般的。(マイペディア)

＊近代都市では宗教と関係のない「祭り」(商店街主催など)も存在するが、本来の祭りは「神様を祀る(祭る)」ものである

b) 祭りの構成要素

(前夜祭、宵宮)——行列、パレード(神輿、曳山)——本祭(儀式)——奉納行事(神楽、演劇)

日本の祭りだけでなく古代ギリシャでも欧米でも似たような要素を持つことが多い

c) さまざまな祭りと芸能

例:

- a) 青森「ねぶた祭」
- b) 秋田「竿灯祭」
- c) 東京「浅草三社祭」
- d) 京都「祇園祭」
- e) 福岡「博多祇園山笠」
- f) 長崎「長崎くんち」

- g) ニューオーリンズのマルディグラ
- h) リオのカーニヴァル
- i) ドイツ ヴィルフリンゲンのカーニヴァル

